

No. 930

立冬

—奥日光—

『あなたは季節の移り変わりを何で知るか』というアンケート調査に、東京では『気象』をいう答えが4割あり、『あまり季節を感じない』が1割もあったそうである。

11月8日、一立冬。こよみの上ではもう冬が始まった。この日、栃木県・奥日光では今年3度目の降雪、先ごろまで美しく紅葉していた山は白一色にかわった。

コンクリートジャングルと呼ばれる大都会では日ごろの暮らしの中で、季節の移りかわりを敏感に感じることは少なくなったのかも知れない。しかし、四季折々に美しい姿を見せる日本の自然を今一度ふり返ってみたい。

公害報告

死の街

死の恐怖におびえるこの街。この街でついこの一月の間に五人の人々がいわれもなく死んでいった。

ここには無数の工場が林立する。かって人々はそこに繁栄のしるしを見た。

この街を通り抜ける街道。やすみなく行き交う車は排気ガスをこの街に残して通りすぎる。この街を流れる川は暗く濁り、そこに浮かぶすべてのものを朽ち果てさせ、生命あるものの存在を許さないかのようだ。この街を照らす太陽までもが暗く陰を帯び薄汚れた顔をかくす。

この街をとりまく自然の環境は何物かによって破壊され、その印象はどこかすすぐてうす汚れている。

しかしこの街にはたくさんの人々が汚染された大気の中で呼吸し生きている。この街の子供達、路地裏は子供の天国。無邪気に見えながら、この街を住み良いと答えた子供は1%。60%は住み良くないと答え7割は病んでいる。危険な子供の遊び場。ここには子供達を育てはぐくむ環境はすでにはない。

しかし、外で遊ぶことのできる子供はまだ幸せだ。

公害病認定患者。小椋雄二君（4歳）。お母さんは外で遊んではいけないという。いつゼンソクの発作がおきるかおののきながら部屋の中で静かに遊ぶ。雄二君には遊ぶことさえ許されていないのだ。

薬は雄二君の「お守り」のようなものだ。

公害病患者は60歳以上の老人と10歳以下の小児が多い。斎藤又藏さん（65歳）。親子代々川崎生れの川崎育ちだ。ゼンソクをわずらって3年、今「公害病患者の友の会」の会長をしている。発作に苦しみながらも『この土地を棄てるつもりはない』この街を離れることができない。

一年前、公害を規制する法律はできた。しかしその法律は企業優先の色濃く市民の命を守るにはあまりにも無力であった。企業は合法的に殺人を犯し政治はそれを許した。住民は今立ち上る。政治の無力をなじり企業の責任を告発する。

しかし公害のひどさに比べ公害をなくす運動は今はじまつばかりだ。政治は無力だ。自分自身が立上る以外に公害と環境破壊を喰い止め、自らが生きる道は残されていない。

今、公害の街川崎は確実に「死の街」へとたどりつけうとしている。